

B-177 被服の着装効果と顔の形態因子との関係についての研究(第2報)  
名古屋女大短大 ○ 栃原きみえ 脊藤一枝 壁谷久代 畠山妃美子

目的 被服の色、柄、デザインと人の個性との関係において、被服の着装効果が異なることは観念的に知られており、その評価は趣味、嗜好や経験にたよっているのが現状である。本研究では個性の要素の一つである顔を取り上げ、眉、目、鼻、口等の顔の形態的因子と被服の着装効果との関係を理論的に明らかにすることを目的とする。

方法 本学短期大学生222名の顔写真による計測値を用いて昨年度は眉、目等の類型化を試みたが、今回はその資料を用いて官能検査を行った。眉は眉長、眉幅による分類の中から最大、最小を含む5種類を、また特殊な形として俗に言う上り眉、下り眉、三日月眉、への字眉を取り上げ、更に眉の明度N1.5、N4、N6.5の3種を加えて相互に組み合わせ、27種類の資料を作成した。目は眼裂長、眼開大径による分類の最大、最小を含む3種類とし、眼角度の大、中、小、また虹彩(黒眼)鞏膜(白眼)の面積比、更に黒眼の位置を含めて組み合わせた54種類の資料を作成した。検査者は本学短期大学生107名とし、強い、弱い両極性評定尺度を用い、7段階評価により官能検査を行った。

結果 官能検査の結果、眉の場合、官能値が大であったのは眉角度が大、つまり上り眉、またN1.5の明度、つまり濃色の眉であった。なお目の場合、官能値が大であったのは眼角度が大、つまり上り目であり、また目に対する白眼の面積比、および眼開大径に対するその線上の白眼径の比が大、つまり黒眼が下瞼から離れて、上に位置する目であった。なお目および眉の各形態因子がどの程度官能値に影響するか、その要因を重回帰分析により、て数量化を試みた。